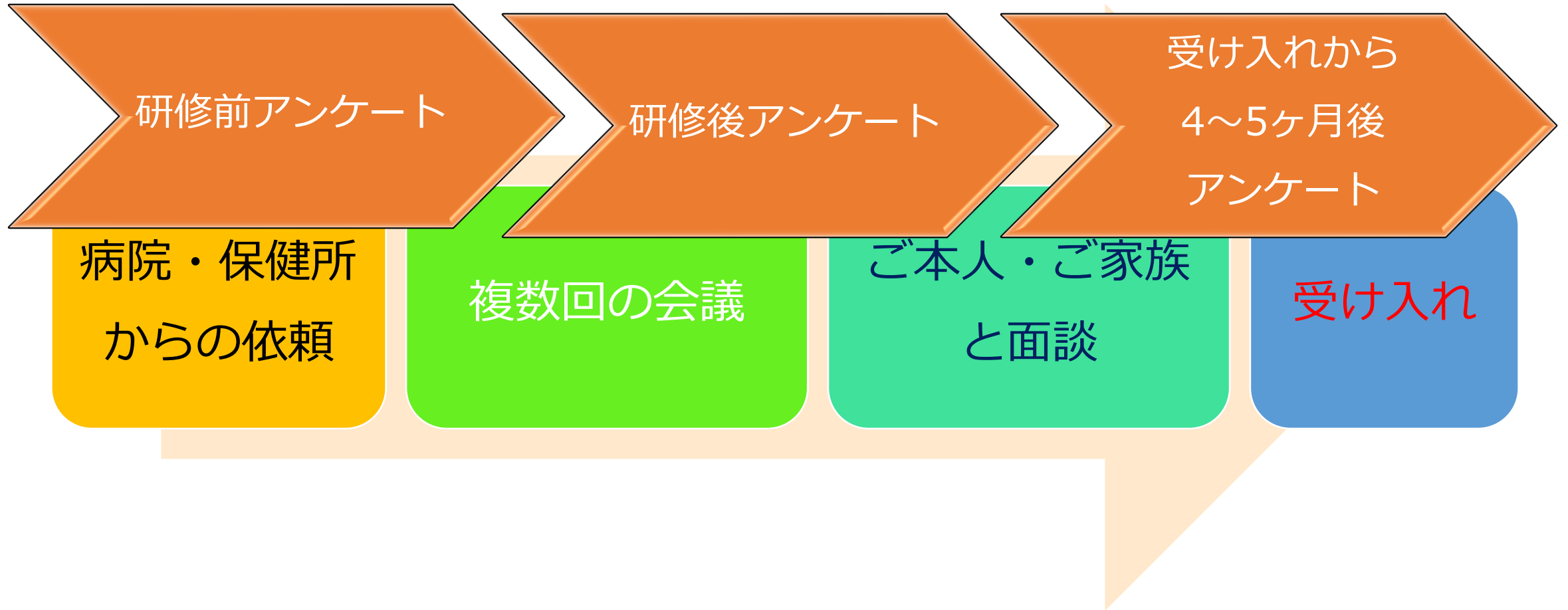
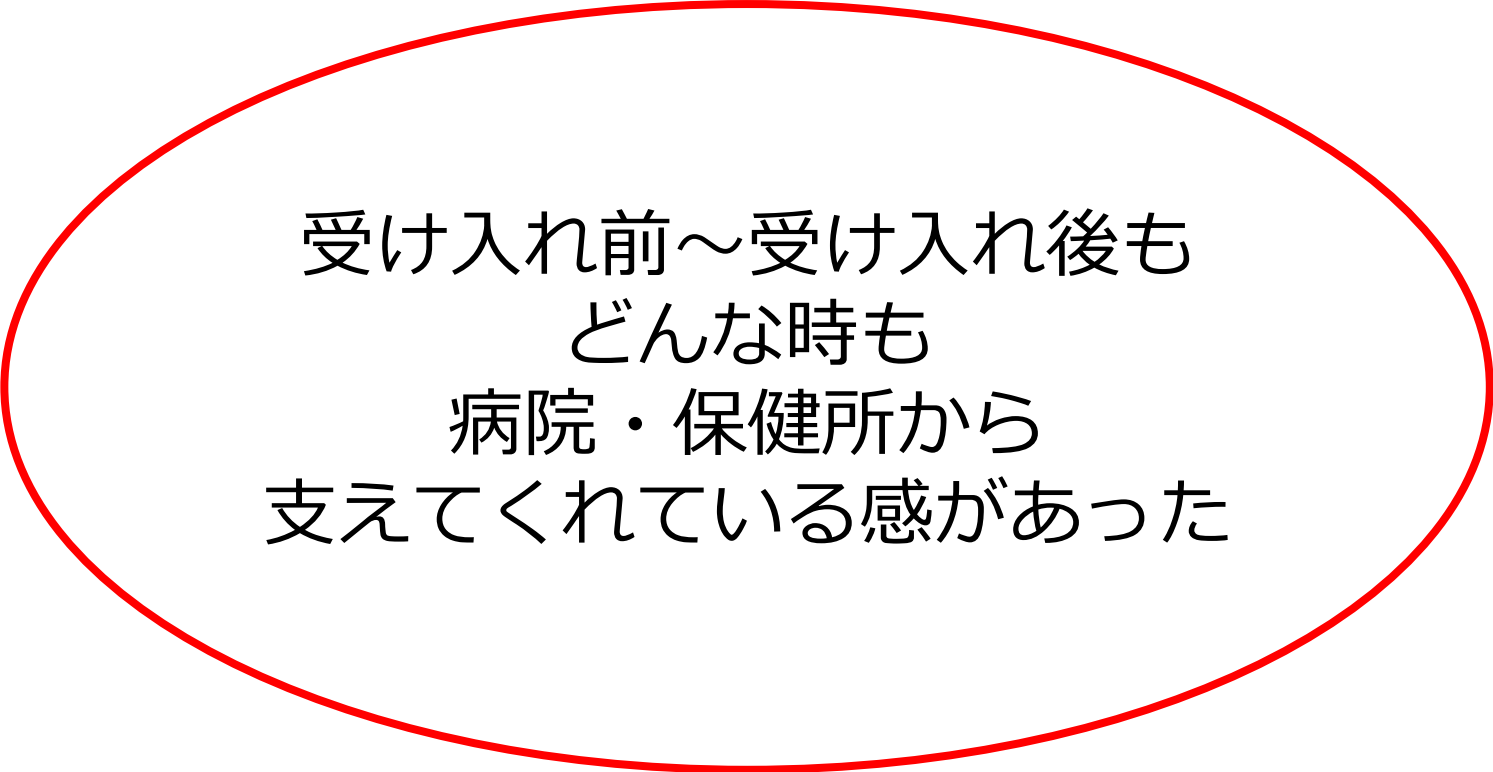


施設での受け入れを体験して

特別養護老人ホーム白寿苑
介護福祉士 係長 岡田美香
看護担当課長 山内恵美

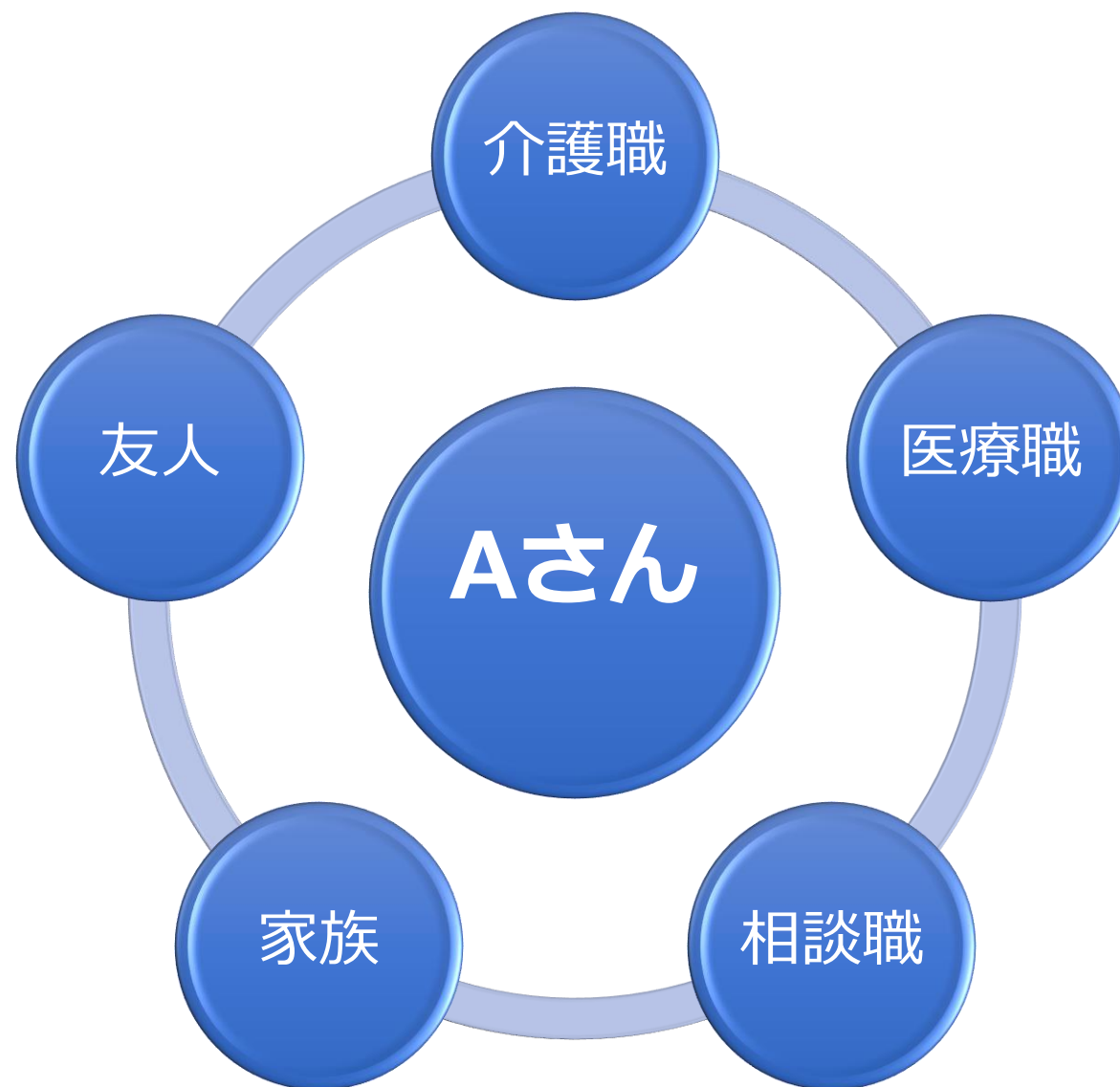
受け入れに対する支援





受け入れ前～受け入れ後も
どんな時も
病院・保健所から
支えてくれている感があった

連携体制



これまでを振り返って思うこと

❀ なってしまったことはしょうがない。後ろ向きに考えると暗くなる。
前向きに考えないと！

❀ まさか、体に穴をあけるなんて思ってもみなかった。
でも、あけて良かった。そうじゃなかったら、栄養も薬もとれず
死んでいた・・・。

❀ みんな、良くしてくれる。 ❀ 大好きで大切なのは、犬と友達！

これまでを振り返って思うこと

🌸ただ、動けるようになりたい！動けることは、当たり前のことだと思っていた。

病気になる前は、そんなことも思わなかったか。

🌸動けたら、なんでもできる！！動けないことが辛い。

研修前後の違い

- エイズ患者やウイルスに感染した人に対する印象は
研修前は「利用してよい」「どちらかと言えば利用してよい」と
約40%

研修後は98%と、肯定的な受け止めとなっている。

受け入れ前の気持ち

H I V感染者を受け入れるというイメージ化が難しかった。



研修前後の違い

(アンケート結果より)



- エイズに関する認識の状況では

「ウイルスに感染した人と一緒にお風呂に入っても、感染しないこと」「ウイルスに感染した蚊にさされて、その蚊に自分も刺されても感染しないこと」など、H I Vの感染方法について、**40%の職員が知らなかった**と答えていた。

しかし、研修から4～5ヶ月後のアンケートでは、**覚えていた知っていたと90%**の職員が答えており、正しい認識が広まっていた。そして、研修効果の継続性も示唆していた。

研修後の自由意見

- 正しい知識をもつことの重要性を実感した。
- 専門職なら正しい知識をもつべき。
- 偏見がある自分に気づけた
- エイズ患者が大阪に多いことや、高齢化していることを知らなかった。若者の病気という印象が強かったので、正しい知識を理解出来てよかった。



研修後の自由意見

- 私たちの時代ではH I Vは恐ろしい病気だと思っていたし、そう教えられていた。でも、今は時間の経過とともに治療法も確立されてきたことがわかった。
- 対応は他の感染症とあまり変わらないことや、肝炎よりも感染力が低いことで少し安心したが、ただ完治がないことが、やはり気になります。
- かかわる機会があるかもしれないと身近に感じることもできた

生活支援を通して (アンケート結果から)

- H I Vだからと言って、特にほかの利用者と違うケアは必要ではなかった。
- 普段通りの感染症の対応と変わらないのであまり、気にせず接している。
- H I Vということを気にかける必要はあるが、そこまで過敏になる必要はない。
- 研修後も、少なからず感染するのではないかという恐怖感があった。しかし、ケアをしていくうちに、薬でコントロールできていることを実感し、次第に恐怖などはなくなってきた。

生活支援を通して (アンケート結果から)

- これまで、施設が受け入れていなかったとは驚きだ。
- 本人の希望することが分かった時が嬉しい。
- 笑顔でOKサインをくれる時は嬉しい。
- スタッフ全員がA氏を受け止めように関わっていることが、スゴイなと思った。
- 言葉が聞き取れず困ったことがあるが、感染症のことで困ったことはありません。

生活支援を通して (アンケート結果から)

- 受け入れる前は、ご本人だけでなく、スタッフの困惑を心配していたが、生活面でのサポートの方がむしろ重要で、そのことをみんなが分かっていたと思う。そのため、受け入れた後、大きな変化というよりも安堵感を感じている。



ま と め

- 研修による正しい知識の研鑽が重要。
- 直接支援を行う介護職・看護職については、正しい病気の知識が前提となるが、あくまでも生活支援がメインである。
- HIV/エイズ患者に対する思いは、個人それぞれあってよし。「怖がってもいいんだよ」というメッセージも必要。
- 行政・医療・介護が連携しあってこそ生活支援が実現する。



その人に接することを、
ちゃんとやって下さい